

## 比較文化論 : 大項目別報告 : 家屋 2100

著者	杉本 尚次
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	74-79
発行年	1990-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003660">http://doi.org/10.15021/00003660</a>

# 家 屋 2100

杉 本 尚 次\*

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1. 屋根型               | プラン)             |
| 2. 家屋床面 (高床と平土間)     | 4. 付属建物          |
| 3. 平面型 (方形プランと円形・楕円形 | 5. ロングハウス (2117) |

家屋では、(1) 屋根型 (2103~2106)、(2) 床面 (杣上あるいは高床家屋と平土間家屋)、(3) 平面型 (方形プランと円形、楕円形プラン)、(4) 付属建物 (2111~2115)、(5) ロングハウス (2117) をとりあげる。なお、風よけ (2101)、半球状小屋 (2102)、樹上家屋 (2116) は事例が僅少のため、解説は省略した。

## 1. 屋 根 型

東南アジア、オセアニア地域の屋根型で、最もひろく分布する屋根型は切妻である。しかし、切妻には複合型と考えられるものが多く、ほぼ5タイプに分類されている [藤島 1952: 147-148]。切妻 (2103) では、とくに棟がゆるやかに上方へ反り上った鞍形屋根ともいえる屋根型が注目される。インドネシア、スマトラ島の Toba Batak, Aceh, Minangkabau など事例が多く、特にスラウェシ島の Southern Toradja の主屋および米倉の屋根は、棟が高く美しく反り上り、破風が前に転んだ優美な形態で知られ、これを支える棟持柱をもつものがある。このような形式は、民族のアイデンティティを強調する象徴的な意味を持ち、近年、より高く美しくする傾向があるという [吉田 1982: 20-31]。

入母屋 (2104) はインドシナ半島北部から中国西南部などに散在している。多くは破風の小さいものである。おそらく屋根の上端に換気や煙出しの開口をとることから、寄棟から入母屋に変化した例が多いようである。寄棟 (2105) も事例は少ない。円錐屋根 (2106) は僅少で、ニコバル、エンガノ、スンバなど東南アジア外縁部の島嶼お

\* 国立民族学博物館第3研究部

よびニューカレドニアとその周辺の島々に多くみられ、円形プラン住居と対応するものが多い。サラワクの Land Dayak の場合、儀礼堂の屋根にみられる。

屋根の構造は、サス(合掌)、和小屋、中柱、その混合型など多様である。近年、太田邦夫ら東洋大学建築学科を中心としたグループによる調査によって屋根構造をはじめ住居の建築構造の詳細が明らかにされつつある。とくに建築構造に関しては工学的システムにおよぶだけに、既存の民族誌的な報告は利用しにくいと批判的である[太田 1984: 165-190]。

## 2. 家屋床面(高床と平土間)

柵上(高床)家屋は床面が地上から離れているもので、脚柱自体が軒桁まで達しているものと、脚柱(杭)と床上とは別の構造になっているものに大別できる。

柵上(高床)家屋(2107)は、中国西南部、インドシナ半島(ベトナム民族および山地民族の一部を除く)、インドネシア(ジャワ中東部などを除く)、マレーシア、フィリピン全域にひろく分布している。床高は多様だが、地上より1.5~2.0m程度のものが多い。海岸、河岸、湖岸(トンレサップ湖畔など)では水中に杭を立てた水上家屋が顕著だが、これも柵上(高床)家屋に含む。

東南アジアの高床家屋は、稲作を主とする平野部諸民族に著しいが、インドシナ半島北部山地から中国西南部地域にかけて居住する少数民族にも高床家屋がかなり分布していることが明らかになったし、最近詳しい研究報告も出ている[周 1986: 901-978; 若林 1986; 杉本 1987]。インドシナ半島北部山地民族、アッサム丘陵のナガ諸族、サバのキナバル山付近の Dusun など、山間部の山頂や尾根付近から山腹に住む山地民族は、家が斜面に立地する関係から片高床(片側を斜面にもたせかける)のような形になるものが多い。これは、家族員の増加やそれにとまなう住居空間の拡大(増室)などとも関係があるろう[岩田 1966: 69-81]。オセアニア島嶼では、ニューギニア海岸部や河岸沿いの地域に多く、トレス海峡諸島、ソロモン諸島、ビスマーク諸島の一部などメラネシアの島々に分布している。高床家屋は、ミクロネシア、ポリネシアにも分布するが、集会所、倉庫など付属建物の場合が多い。熱帯洋風住宅は高床形式をとるものも多く、急速に普及しているが、これが各地の伝統的住居に影響を与えている。

平土間家屋(2108)(地面と同じ高さの床をもつ家、地面に直接家を建てる。地床式ともいう)は、中国各地とインドシナ北部山地、Vietnamese の居住地域と、各地

の中国人（華僑）の住居に著しい。その他、ジャワ中部以東、モルッカ諸島のブル島、セラム島、ハルマヘラ島の一部（Galela）[石毛 1978: 183-192]、バリ島、ロンボク島、フローレス島、チモール島の一部など小スンダ列島の島々、トレス海峡諸島、ニューギニア山地部などに分布している。現在の中国人（漢族）の住居様式は平土間式である。Vietnamese の民家は低い土台の上に建てられるが、これは中国文化の影響とみられ、トンキンから海岸に沿ってメコン・デルタに拡がっている。インドシナ半島北部山地民族の平土間住居も中国文化の影響をうけている。ジャワの場合は、インド文化（ヒンズー文化）との関連が考えられる。アッサム地方のナガ諸族にも平土間家屋がみられるが、平土間を主とするインドの住居様式の影響であろう。小スンダ列島の場合、高床式からの変化型とみられるものもあるが、とくにバリ島、ロンボク島の場合、インド文化の影響が考えられる。盛土または石壇の上に家を建てる形式は、ポリネシアではパエパエとよぶ。マイクロネシアではヤップ、パラオ、カロリン諸島西部からポナペ、コシャエなどカロリン諸島東部にかけて分布している。李亦園は、石壇基礎を伴う家屋が台湾、フィリピン（ルソン島）、マイクロネシア、ポリネシアにひろがる分布状態から、これを非インドネシア的な文化の流れと考えている [李亦園 1957: 117-144] が、一方、東南アジアからの巨石文化（ドンソン文化）の伝播と考える説もある。

高床家屋は、レーマン (Lehmann, J.) [LEHMANN 1904] によって世界の分布が調べられている。しかし、調査時期が古く（1904年以前）、自らのフィールドワークに基づく資料ではない。しかし巨視的には19世紀の状況を知る資料として重要である。高床倉などをふくめると、柁上（高床）家屋はシベリア諸族、アフリカ、南米、ヨーロッパにもみられるが、数量的には東南アジアやオセアニア島嶼の一部に多く、東アジアの日本（半高床式）が入る。この中で最も重要な高床家屋の分布地域は、東南アジアの平野部であり、高床家屋（主屋）と高床穀倉（1319）（米倉）がセットになっている事例も多い。

東南アジアからメラネシアの島々の一部にかけての高床家屋の伝播は、ハイネ＝ゲルデルン (Heine-Geldern, R.) によれば、いわゆるオーストロネシア諸族によってもたらされたと推察している [HEINE-GELDERN 1923]。ポリネシアやマイクロネシアに分布する石壇の上に家を建てる傾向は、家屋を地面や水面から高くさせる一つの表われとみるならば、これらもオーストロネシア系の文化の流れの一環として考えることができるかもしれない。

### 3. 平面型（方形プランと円形・楕円形プラン）

住居の平面型では方形、矩形が大部分を占める。円形、楕円形プラン（2110）の住居は、僅少だが、東南アジアでは、アンダマン、ニコバル、ニアス、エンガノ、フローレス、スンバ、チモールなど縁辺部に分布し、トレス海峡諸島（現在消滅）へ連なる [杉本 1982: 1-57]。メラネシアでは、ニューギニア高地に円形、楕円形プランが分布し、ニューアイルランド、サンタクルーズ、ニューカレドニアとその属島、フィジー東部のラウ諸島など、メラネシアとポリネシアの境界付近の島々に散在している。ポリネシアでは、サモア、トンガ、フツナ、ウヴェアなどに分布が濃厚である。タヒチにも伝統的住居に円形平面のものがあつた。戦後の考古学的調査の結果、マーケサスの最古の住居址やソロモン諸島の住居址も楕円形のものが確認されており [近森 1984: 256-272]、過去にひろく分布していたことが明らかになりつつある。ミクロネシアでは、中央カロリン諸島や東カロリンからマーシャル諸島にかけて、半円錐状に妻庇を付加した楕円形プランの家屋が報告されている [浅川 1980: 112-182]。

伝播関係では、東南アジア縁辺部—ニューギニア—メラネシア、ポリネシア、あるいは、ミクロネシアの円形、楕円形プランとの関連も想定されている。また一方、ポリネシアに多い円形、楕円形プランがポリネシアン・アウトライアーを通じてメラネシアやミクロネシア（カロリン諸島）に伝播した可能性も考えられる。円形、楕円形プランとの関連は不明だが、特色ある平面型として、六角形プランの住居や集会所がミクロネシアのヤップ島を中心とした中央カロリン諸島に分布している [小林 1978]。サラワク西部の Land Dayak は円形（高床）の儀礼堂をもっているし、台湾高山族のうち Tsou, Puyuma, ラオスの Black Tai, アッサムのナガ諸族 (Konyak Naga, Lhota Naga), 雲南省の少数民族 [雲南省設計院雲南民居編写組 1986] にも楕円形プランがみられるが、現在の分布は限られている。なお、円形プランと楕円形プランで小屋組が異なるなどの事例があるので、別個に検討する必要もある。

### 4. 付属建物

炊事舎（2111）は、主屋とは別棟に建ったものをさす。この形式は東南アジアにも散見するが、分布の濃厚な地域はミクロネシア全域とポリネシアの大半の地域であり、地炉（1409）の分布とはほぼ一致する。

産小屋 (2112), 月経小屋 (2113) などは妊婦や月経の女性を忌む習俗から日常生活の場から隔離した生活をするためのものである。

産小屋は、ミクロネシアに多く、ニューギニアおよびソロモン諸島などメラネシアにも分布している。月経小屋は、マリアナ諸島を除くミクロネシアの島々に著しく分布している。しかし、産小屋、月経小屋などは第二次大戦後、キリスト教の布教などによって急減しており、現在ミクロネシアでは中央カロリン諸島西部の小離島に僅かに残存するのみである [杉藤 1982: 349-415]。ニューギニアでは山間部に僅かにみられる。東南アジアでは事例は少ないがモルッカ諸島、セラム島の **Wemale** に事例がある。

カヌー小屋 (2114) はミクロネシア、ポリネシアの島々に分布が集中している。

男の家 (男子集会所) (2115) はオセアニア島嶼部にひろく分布している。とくにニューギニアに著しく、メラネシアの島々に分布している。一般にメラネシアに著しいが、これは村落共同体の強固さの表れとみることができよう。集会所はミクロネシアにも分布している。とくに西部カロリン諸島に立派な鞍形屋根の集会所があり、生活上重要な役割を果たしているようである。ポリネシアではゲストハウス程度のものが多い。東南アジアではインドシナ半島山間部に散在するほか、台湾高山族の **Ami, Tsou, Puyuma, Paiwan**, アッサムのナガ諸族などに事例がある。

これら付属建物を生活機能や種々の目的によって別棟に建てる傾向は、地域的にはミクロネシアとポリネシアに比較的多くみられる。生活機能別に建物を造る (分棟化、別棟化) 傾向についてはまとまった研究がある [岡 1958; TISCHNER 1934]。

## 5. ロングハウス (2117)

東南アジア地域では、中国西南部雲南省シーサンパンナの **Jinuo** [田中 1984: 343-370], ビルマの **Kachin, Karen**, ベトナム南部のアンナン山地の **Sedang**, 南部の **Ma**, ベトナム, カンボジア国境付近の **Muong** (平土間式), **Rhade**, マレー半島北部山地の **Senoi** にみられる。島嶼部ではスマトラの **Minangkabau, Karo Batak** の慣習家屋がロングハウスである。ボルネオには分布が顕著でサラワクの **Land Dayak, Iban, Kayan, Kenyah** のものが建築上も大型である。サバでは僅少だが **Dusun** にみられる。カリマンタン山間部にも散在するが、数量的にはサラワクに多い。

ニューギニアではフライ川河口のキワイ島をはじめ、ゴゴダラ地方、セピック地方

の一部やヘルフィンク湾岸、イリアン東南部に住む Asmat に事例がある。ロングハウスは大半、高床式 (2107) になっている。

Land Dayak や Iban のロングハウスに関しては、とくに建築構造上も居住の面からも特徴があり、フリーマン (Freeman, J.D.) をはじめ諸氏によって研究が行なわれている [FREEMAN 1955: 1-21; 関根 1979: 54-107; DOMENIG 1980; MILES 1964: 45-57; LOEB and BROEK 1947: 414-425; 杉本 1982: 47-57]。